祇園精舎云々―平家物語發端の句を取れり　祇園精舎―祇陀園に須達長者の建てたる寺　沙羅双樹―跋提河の邊にて釋尊入滅の際枯れかかりたる木　受領―國司　衛府―近衛、衛門、兵衛各左右の六府

孕常盤

近松門左衛門作

序詞　祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響有、沙羅双樹の花の色、盛者必衰のことはり、驕る者久しからず。遠く異朝をとぶらふに、秦の趙高、唐の祿山、近く本朝をうかがふに、天慶の純友、承平の將門、間近くは六波羅入道前の太政大臣平朝臣清盛公の有樣こそ心も詞も及ばれね。我身の榮華を極るのみならず、嫡子小松の重盛内大臣の左大將、次男宗盛中納言の右大將、三男知盛權中納言、四男重平三位の中將、門脇の宰相經盛、前の大納言教盛。池の大納言頼盛、越前の三位通盛以下、一門の公卿十六人、其外諸國の受領衛府、八省すべて六十余人。官祿前代に超過し、榮華天下の目をそばめ、華族の三公、英雄の公達も肩を竝ぶる者はなし。されば一朝の怒に其身を忘るゝとや。院の御所を恨み奉り、天命をも省ず、後白河の法皇を鳥羽の北殿に押籠、卿相雲客四十三人流罪に沈め、小松殿の教訓をもいさゝか用ひず、擅なる入道相國、驕る平家の行末を、浮べる

浮べる響―あぶなき事、不義而

富且貴於我如浮雲（論語）
所勞—病氣
能化指南—師匠
護摩—梵語にて梵燒と譯す、身の幸、國の厄を祓ふ爲佛前にて焚く
滅燼す、碎す—皆語尾「る」を省けり
ヱヤ—そ奴の略

雲と賴みなく、思ひ積りて雪折れの小松殿の御所勞、良藥醫療の驗もなく、御病氣重らせ給ふとて、一門殘らず西八條入道の館に輿參あり、「靈佛靈社の御祈禱の大法有べきか」と、評諚とりぐなる處へ、播州書寫山の衆徒中として訴へしは、「去年の春より比叡の山育ちと申惡法師、學問の爲とて登山いたし候が、竝びなき强力、劍術、早業に調練し、同學の兒法師を疵付、能化指南も恐れぬあぶれ者。一山もてあつかひ夜中に追拂ひ候へば、松明持たる下僧を摑んで、本堂の屋根へ人礫に打上げ、松明檐の檜皮に移り、折節山風烈しく、諸堂、學寮、一宇も殘らず回祿に及び候。名は西塔の武藏坊辨慶と申惡法師、搦取て候」と引出す、面がまち筋骨高く、頰骨荒れ、繩取六人中に引立、睨み廻せる頰黑く、護摩に燻る不動尊、玉顏光るに異ならず。淸盛入道緣先に跳出「ヤア憎くい法師が頰つきかな。己れ如何なれば爭ひ喧嘩を好み、諸人にきず付、剩へ大伽藍を滅燼すは、頭を丸め三衣を著す法なるか。察するに叡山法師、平家を傾ふとしたまふ法皇に與し、己れを賴み方々を暴れさすると覺へたり。サア眞直に申せ。僞らば是を見よ、淨海が此握拳にて、しや頭微塵にはり碎かん」と、睨付給ひし面色は、白いと黑いと辨慶が、二人有かと凄じし。武藏けら〳〵とゐせ笑ひ。「扨色々の御尋、一ッも辨慶存ぜ

逆鋒―爭の鋒に持出した酒落

ぬ事、先諸人に傷付、傷を負せし事、是は相手の臆病、「何故其時に討留ぬ」と、相手を御詮義なさるべし。又書寫山回祿の事は、松明持たる下僧を人礫に打て候へば、時節惡き山風辨慶が知らぬ事、風の神にお尋あらば明白に知れ申さん。且又出家の法に背くとは左宣ふ入道相國、袈裟衣を懸け、頭髏を丸めながら、法皇を押籠め、諸人を流罪死刑に行ひ、「此法師がしやかうべをはり碎いてくれん」と、只今の握拳、是も法師の道成か、御心に問ひ給へ。又辨慶が爭ひ好み、喧嘩好きは生れついての癖なれば、是も我等が存ぜぬ事、親こそは知つらめ。定て胎内に宿る時、父と母とが小夜の口說、爭ひ紛れの天の逆鋒、逆立たる一滴が凝結て、喧嘩好きの辨慶と生れたそふな」と、空嘯いてぞ居たりける。さすがの淸盛理窟詰、「なまなか彼奴に物いはすな。打首か獄門か、兎角方々計らはれよ」と有ければ、宗盛、知盛詞を揃へ、「もと叡山育ちと申せば、彼を罪に行はれば、例の三千坊如何成仇をか仕出さん。をのれと亡ぶる御仕置あらまほし」と、宣ふ處へ、筑後守貞義慌忙敷參上し、「去る卯月下旬より、五條の橋に十六七の小童、夜な〳〵往來を惱し、打れしもの九百餘人。夜廻がよりの役人召捕んと働け共、蝶鳥なんどの如くにて力に及ばず、京中難義仕るよし毎日の訴訟、如何計ひ申さん」と言上すれば入道相

飯綱―狐を使ふ魔術

國、「ム、それは豫ても聞しこと。何條其小童、魔法飯綱を行ふ共、變化鬼神も討てば討つ、軍兵を差向け、はや討取れ」と下知せらる。門脇宰相進み出、「仰にては候へ共、左程の童一人に軍兵を向けられんは、却つて都の騒動。夜廻係の者共が手に餘るしれ者ならば味方多く損ずべし。然れば當家の恥辱と申、殊に小松殿の御病中、旁御遠慮有べき事。されば敵を以て敵を亡す手段、彼の法師めを放ち遣はして、打合せて御覽あれ。相打に討れば二人の惡黨滅ぶる道理。さもなくても一人は手を濡さずの御誅罪、此旨如何」と申さるれば、辨慶聞も敢ず、「アヽ面白き御政道。元來某武藝を好み、日本に慢る手柄したしと思へ共、手痛き奴も無つしに、洛中に持餘す天狗冠者と勝負せんは、嬉しや嬉しや嬉しうて堪らぬ」と、すく〳〵立てぞ悅びける。入道も悅喜有、「それ繩を解よ。出來いた〳〵ういう坊主。まづ太刀、刀、長刀などが入ならば、取らすべきか」と宣へば、舞いや〳〵此儘罷出、行逢ふ人の太刀、刀、目に付たをもぎ取べし。此法師生れてより人に物囉はず、お床に立たる彼の長刀、御門にかゝりし突棒、刺股、火消道具の熊手、鋸、大槌など囉ひは致さぬ欲さに取」と、引寄せ〳〵一つに取てからげたり。入道猶も機嫌能く「扨々氣味能い法師めかな。千騎萬騎の軍兵の頭に立人相」と、簾中につゝと入、

ういー―殊勝な

づく—鈔

銀のづく打たる鐵の棒提げ、遉「是は源氏の大將、鎭西八郎爲朝が得道具、去る平治の軍に義朝一家を攻滅し、討取たるしるし。是にて童を打ひしげ、遣はせぬぞサア取れ」と投出せば辨慶、一つに摑んで數を讀む。「三本、四本、五本、六本、是こそ忝け七ッ道具」と勇み行。平家の威勢引換て、源氏は鬼に鐵棒の、武運の末ぞ三重頼しき。世に連て替れば替る常盤御前、我子の命助けん爲、清盛に從へば、心に入らぬ乘物や、御共美美敷侍きて、小松殿の御祈禱に清水詣の御下向道、姿は花を飾れ共、覺悟は出家同然の、心に衣胸に袈裟、五條の橋にぞ著給ふ。爰に源の牛若丸、三年の日參の、願も今年は秋の日や、はや暮かゝる橋の上、山々敷女乘物に茶辨當かたげしは、折々鞍馬へ使に來る喜三太といふ下郎、扨は我母常盤御前、摺違ふて通るならば、見知りし者も有やせん。人に心を付顏に、戻られもせず盤桓と、編笠傾けおはせしに、喜三太見付、乘物へ知らせんと、曷彼の若衆の道のねばさは、あれこそ本のくらがりの牛、鞍馬の牛」とかすらする。常盤はそれぞと心付、人目よぐまの遣瀨なく、常「ハアヽ悲しや數珠を落した。我身の菩提は兎も角も、平家の御代の御祈禱に、三年以來隨救陀羅尼百萬遍、此度小松樣の御願の爲、千手の眞言十萬遍、唱へ込みたる大事の數珠。勿體なくも氣にかゝる。水

卷七ッ道具—卷なき七ッ道具

御共—御供

秋の日—秋に願があくをかく茶辨當—外出の時茶道具辨當を一荷にしたるもの

盤桓—進み難き貞雖(盤桓)志行正也(易經)

かすらす—牛若丸也と仄めかす

隨求陀羅尼—隨求は願を叶へる意陀羅尼は佛の秘密にて誰も解し得ぬ經文

千手—觀音の陀

羅尼　半將束―將は藍にて琥珀と水晶の半々の仕立　でしとだつま―でしは弟子珠として四個の小玉　たつまは達磨と書いて大珠

督殿―衛府督にて義朝をさす

晶と琥珀と半將束の紫房、でしとだつまは珊瑚樹ぞや。皆立歸つて尋てたも。拾ふた者の有ならば、價を取らせ囉ふておじや。喜三太獨附置て皆々早ふ」と宣へば、「今迄落てはよも有まじ。拾ふた人を詮義せん」と、方々へこそ走りけれ。常盤輿より轉び出、「やれ牛若が母なるは。鞍馬へ上しは七ツの年、それより喜三太に文の便を聞計、十年振の我子の顏、見せてたもや」と引留め、抱付て泣給へば、牛若夢の心地して、涙に沈みおはせしが、牛「故督の殿に後れしは三歲の時なれば、面影も覺へ參らせず。母上の御顏は慥に覺へ候が、見替す程の御寶れ。斯く由々敷御身にて、何不足の候ぞ。敵淸盛に御身を任せ、平家繁昌の祈禱、小松殿の祈とて、眞言陀羅尼に數珠の所作、淸盛への追從か。心の變つた母上樣、其お心では牛若を不便共思されじ。何しに父も戀しからん。御涙は空事よ。恨めしの母上や」と、恨みかこちて泣給ふ。母上わつと涙に暮れ、「たまたま逢ふて愛らしき、親子の詞をかけもせず、情なの恨みやな。母が心を文にても知らせんとは思ひしが、師の御坊や傍輩に、漏もやせんと控へしを、知らで恨みも道理なり。督の殿討れ給ひてより、御身を母が懷に入、伏見の雪に凍へ伏し、大和の國宇田とやらんに隱れしを、平家に探し出され、御身も二人の兄共も、殺さるゝ笘成しに、淸盛入道

自に心をかけ、妾物にせんといふ。無念やな口惜や。源氏の大將義朝に枕を並べし此常盤、指す敵の平家に辱しめらるゝ事、恨めしのみめ容　面に燒鐵漆さし、顏を損ひ此無念、聞まじと思ひしが、待てしばしと思案をかへ、清盛が心に從い、種々に口說きしかば、色にひかるゝ愚の清盛、扨こそは和御前達、命を助け置しなり。母は女の道立ず、末代に名を棄るも、御身達を成人させ、平家を亡し、源氏の代と飜へし、つまの敵も氏の恥辱も雪がんと思ふ爲計。老入道の清盛、光る源氏か業平か、何に色香の有べきぞ。床を並ぶる寢臥には、火炎の上に寢るよりも、其苦しさを推量あれ。語るも涙が翻るゝぞや。されば共小松の重盛は日本の賢人、此人あらん限りは、平家は亡び難しといふ。時しも重き病氣なり。自ら御祈禱の七日詣と僞り、清水の觀音樣に重盛の命を、七日が中に取殺してたび給へと、調伏の爲、繰る數珠は我身ながらも恐ろしや。聖人賢人の命を取るは、菩薩を殺すに同じくて、五逆罪に勝ると聞。妻の爲子の爲、現世後生を取失ふ母が心を思遣り、恨みを晴れよ牛若」と、搔口說給ふにぞ、牛若も手を合せ、「知らで恨みし恐れの段、眞平御免」と計にて、非歎の涙せきあへず。常盤重て、「聞ば此比此橋にて、十六七の小童の往來を惱すとは、疑ひもなくお事よの。大義を思ひ立者は、無益の殺生

恨めしの云々―經緯のよいのが結句恨めしい

氏―源氏

調伏―人を呪詛して殺す事

非歎―悲歎

修羅前云々―戰場の畑馬の口は如何なる駑馬でも引廻すと也

馬屋を得たる―馬の世話に長ずる

せぬことぞ。數珠落せしとは供人除けん詐語。是を持て佛神を信心あれ」とてたびければ、牛若戴き懷中し、牛「全く無益の殺生ならず。源の牛若が下人一人持ずして、大事は思ひ立れずと、千人切を企て、手練を見屆召使はんと、夜前迄九百九十九人切て候へども、是ぞと思ふ下人もなし」と、語り給へば喜三太、「畏れ多く候へ共、拙者を召れ下されかし。外の事はいさ知らず、修羅前の御馬の口は、蛇に綱つけても引廻し、雜兵の首四ツ五ツは寢起に成共仕らん」と、申せば母も悅びて、「ヲヽ幸々、跡は妾に任せ置直に共せよ。あれ〳〵下人共が立歸る。何を云ふ間もないはいの。氣早な心持ちやんなや。喜三太萬事に氣を付よ。さらば〳〵」と乘り給へば、名殘盡せぬ親子の中、振返り振返り、牛「をのれは馬屋を得たるとや。當分夫は要らぬ事。馬に乘る迄牛若が、草履直せ」と笠被き、一町計別れし處へ、供の人々立歸り、「如何樣に尋ても御數珠は見へ申さず。拾ひし者も是なし」と申上れば、當ヲヽ其筈〳〵。喜三太めが拾ひ隱せしを、袖口より見付られ、直に欠落したそふな。内府樣の御祈禱。沙汰なしにして遣りや」と、有そふに宣へば、供「扨は生掏摸の盜人、憎や〳〵」と口々に、云繰返す水晶の、數珠より清き常盤の前、涙に暮れの日も入て、月は出けり三重夕雲の、行衞はそれか夜嵐の、聲澄渡

内府樣の云々―重盛樣の祈願中なれば盜んだ事を荒立てるなと也

る秋の風、武藏野ならぬ武藏坊、何處にて取たりけん、緘に緘せる黑革の大鎧、大長刀、宛がら鬼神と夕顏の、五條の橋の橋板を、とどろ〳〵と踏鳴し、童遲しと待居たり。牛若は母上の敎訓に力を得、そどろ浮立つ出立は、赤地の錦の著長に、美精好の大口、重代の御佩刀、取て被きし薄衣の、行げた遙に見渡せば、二王の樣成法師武者「人か見越入道か。何にもせよ心見て、押へて下人にせん物を」と、ゆう〳〵と歩み寄り給ふ。辨慶は斯ぞとも、白柄の長刀欄干に横はし、仕懸を待ば牛若丸、通りさまに長刀の、柄本をはつしと蹴上たり。辨「すはしれものよ、手なみを見せん」と切てかゝれば、薄衣引除け、太刀拔放つて、詰つ開いつ、潛つて切れば反向て外し、裾を拂へば足をためず、中を拂へば首を地に付、三塔に隱れなき長刀の達者と、僧正坊に授りし打物の名譽と、甲乙分目の戰ひは、巢立の鷲の若鳥と、深山を出し荒熊が、野邊に爭ふ三重如くにて、さしもの辨慶あぐんで見へしが、「物々し小冠者め」と、疊みかけて討處を、擬寶珠に飛上り、片足かけて長刀を、からりと踏で踏落す。辨「さ知たり」とかけ寄て取らんとすれば打物取のべ辨慶が、押付をしつかと押へ、牛「何と御坊應えたか。我千人切を思立、根性見屆け下人にせんと、九百九十九人切る。汝程の健氣者に出合ず。主從に成べきか。我

著長―大將の鎧
精好―厚くて美しき絹織物の大口袴
行桁―橋の行桁に着物の桁をかく
潤めず―止めず
三塔―一山に三塔ある故叡山を云ふ
物々し―小癪な
押付―鎧の後方

こなし―打碎く

こそ左馬頭義朝が八男牛若」と名乗給へば、弁「ヤア願ふてもない主君。我等は熊野の別當辨眞が一子、武藏坊辨慶と申者、清盛に賴まれ、君討奉る筈なれ共、約束變替世の習ひ、今日より生々世々お主と賴み奉る」と、降參すれば御悅び、主從三世の緣のはし、五條の橋の橋柱、氣太るお主、根强い下人、と薄衣被け長刀擔げ　立歸らんとせし處へ、難波の次郎が弟、難波の十郎經時、夜廻りの足輕二三十、經「洛中惱す天狗冠者、討手に向ひし惡魔坊主が一味せしは。あれ討留め」とどつと寄る。新參の喜三太、見へ隱れの供せしが、「其處御退」とつゝと出、喜「是體に御太刀を合されんは勿體なし。下拙こなし申さん」と、面も振ず切かくる。難波の十郎きつと見て、「彼奴は御厩の喜三太め、をのれも暴者の同類か」喜「ヲヽ我は馬の口も取、時々人の首も取る。嘘なら取て見せふか」と、駈寄せ〳〵雜兵の兩足、小腕　引摑み、橋の下へ取て投げ取て投げ、七八人投ぐるを見て、皆散々に失せてけり。され共十郎踏留め、只一打と打太刀を、引外いて裏へ拔け、後抱きにむんずと締め、指上て橋板にどうど打付け、太刀もぎ取り、首搔落す早業は、實にも下郎の手鑑と、末世に殘るも道理なり。牛若ます〳〵勇みをなし、「出來た〳〵。一人不足の千人切の數に入れてくれん」とあれば、喜三太頭を掉て、「いや〳〵君の數に

は恐れなり。我等御奉公の手見せ。蠅同然の難波の十郎、其の十の字に蠅が留れば千人切」と、主從どつと笑ひの聲、雞は八聲の凱歌や、曉近き三重松の風、無常の嵐吹きすさぶ。小松殿の御病體、日にしたがつて賴みなく、限り近しと聞へしかば、一門はいふに及ばず、公家、武家、町人、農人まで、六波羅に群參し、眉を顰むる折から「清盛入道御入なり」と有ければ、維盛、資盛迎ひ參らせ、枕本に請ぜらる。やう〳〵助け起されて、衰へ果てし顏に。鬼の樣なる入道も、やゝ涙ぐみおはせしが、「御邊の所勞大事の由、當家他家の歎きなり。然るに此度宋朝より、耆鵠天といふ名醫日本に渡り、病人の顏色を見て肺肝を知り、聲を聞て六脉を察し、一粒一匕の藥を與へて、死したる者をよみがへらせ、長生不死の壽命授くる事、恰も神の如し。則其醫者召連れたり。脉を見せ藥を請、本復の色を見せて給べ。入道無病息才の身なれ共、唐の醫者の名方、不老不死の藥を、はや一廻飲だれば、千年の命は慥なり。又二廻服したらば二千年は生延ぶべし、假へ萬々年にても、入道計存らへ、孫子の跡のとい弔ひやかましむづかしし。御邊も共に生て給へ。耆鵠天是へ召せ」と宣へば、今を限りの重盛公、起直つて、亶「暫く〳〵其唐の醫師が不老不死の藥を、父禪門はいはや聞召れ候か」潤「中々常に身を放さず夜に、

六脉―浮、沈、遲、數、滑、澁の六種の脉潤一粒―匕―少しの丸藥、粉藥

三界―欲界色界無色界なれども此娑婆の事　大覺世尊―釋迦牟尼佛―天

大道云々―地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天、苦輪は苦境

五戒―殺生、偸盜、邪淫、妄語、飲酒　出離生死―苦界を脫して心を淸淨にす　無上菩提―尊き佛の道

三度、日に三度用るなり」と宣へば、重盛公涙はら〳〵と流し、「ア、淺ましや平家運命果て、世は魔道に落けるかや。それ乾坤の間に生を享け、形有物は天命有、初あれば終有。三界の敎主大覺世尊、耆婆が良藥叶はずして、跋提河の涅槃に入給ふ。病者は佛躰、醫師は耆婆、定業の天命藥によらば、釋尊入滅有べきか。秦の始皇は不老不死の藥を得んと、上は碧落、下黃泉を探せ共求ず。但天竺の小道の法は億萬劫を有ち、中華の仙術形を離れて、氣を食ひ風を飲み、千歲を延ぶれ共、生死の悟を得ざるゆへ、六道の苦輪を廻つて地獄に落ると承る。我朝には天狗の法、我慢功慢人の心を柄家として、善根を憎み惡行を悅び、夜に三度日に三度、鐵の熱湯を飲む苦しみに天狗道成就し、生もなく死もなし。此魔法の外、三國に不老不死の藥候はず。疑もなく愛宕鞍馬の大天狗、平家驕りを荷擔人に、世を覆さん天魔の見入。其藥重盛に見せ給へ。生を貪る愚蒙の目には良藥と見ゆる共、五戒を保ち五常を修め、正法を守る重盛が淸淨の目にかゝらば、藥の邪正は顯れん。假しは誠の藥にもせよ、位太政大臣に經上り、日本六十六箇國、三十餘國は平家の知行。齡六十に超へ給へば、出離生死の御營み、無上菩提の願ひの外、何御不足の候て。煩惱業苦の浮世に長命の御願ひ、淺ましさよ」と計にて、又咽かへり給ひ

瓦りやく—瓦礫か

正念—死際に心の亂れぬ事
下種—種もろし

ける。入道嘲笑ひ、「又癖の生悟り、其心より煩らはるゝ。御邊は兎も角も、此入道は文盲なれば、藥を服て長生せん。それそれ」と有ければ、輿の内に入られし唐桑の櫛匣より、堆朱の香箱御前に差出せば、入道愼み頂戴有。蓋を取らんとし給ふ時、香箱の内燃え出て、火焔烟を捲上、微塵に碎け飛ぶ音は、瓦りやくを割るが如くにて、流石の入道色變じ、上下身の毛を立たりけり。重盛涙を押へかね、「御覽候へ、犬狗の所爲、毒氣五躰に泌渡り、大熱病を受け給ひ、火の病となつて御命を取らん事三年とは過べからず。それより平家の運命傾き、源氏に世を切取られ、今の榮華は引換て、一門骸を暴すべき、重盛が未來記は其時思ひ知らるべし。淺ましの運命や、墓なき平家の行末を見んよりも重盛が命を取てたべ、と熊野權現に祈誓をかけし病なれば、藥も療治もかなふべきか。臨終も早今宵の中と存ずれば、是今生の親子の別れ。心の亂れぬ其中に、正念の床に坐し、淨土の道をも踏分て、御菩提の下種し奉らん。さらば〳〵」と涙にくれ、御子達の方に添ひ　泣く〳〵佛間に入給ふ。「平家の柱折れたり」と、惜まぬ者こそなかりけれ。入道相國大きに怒り、すつくと立、「ヤア愚なる内府の詞、此淸盛が威勢に、木の葉天狗の見入などとは思ひも寄らず、源氏の奴等が所爲ならん。唐人醫者め引立來れ。穿鑿せ

ん」と宣ふ處に、辻風さつと吹來り、梢を鳴し木の葉を捲き、檜を破り瓦を飛し、遣戸障子を吹折て、震動するぞ三重恐ろしき。御供の瀬尾の太郎、蹶ひ〳〵罷出「彼の唐の醫者、一丈余りの鳶となり、車輪の如き翼を廣げ、風を起し雲に乘り、鞍馬の方へ飛失て候」と、申間に空晴て、風おさまるぞ不思議成。入道大きに仰天有「さては小松が詞に違はず、天狗に毒氣を吹込れた。三年の内火の病で死ぬるとや。三年の經つは今の間。入道は死ぬるか　ア、扨是は何とせん。エ、死ともない〳〵。妙藥は有まいか、天狗のあたつた療治はないか。誰ぞが高ゐ鼻を剿で、煎じて服で見よふか」と。顕動愁傷うろ〳〵と、狼狽給ふぞ見苦しき。唐「ア、思ひ付たり。黄金は毒を消す。先年奥州の黄金三千兩、内府が庫に籠させたり。それ取出せ」と宣へば、小松の執權主馬の判官盛國罷り出、「平家の御運未危く、日本にて御一門の跡弔ふ人も有まじとて、唐育王山佛生禪寺の御寺へ、祠堂に御渡し候」と、いひもあへぬに飛懸て、しや首取てひつしき、唐「主が主なればをのれら迄馬鹿律義。目前日本の寶を、見へもせぬ後世の爲、異國へ渡す倥侗者、それこそ唐へ投金といふ物。入道が命三年切、存命の間に源氏の末葉根を絶やす。軍初の血祭」と、肩を踏へ、盛國が髻を摑んで「ゑいうん」と、首引抜てかつぱと投

祠堂―祠堂金にて供養料の事

唐へ投金―無用の所へ金を捨てる譬

け、「サア常盤御前も討て捨て、法皇を流罪に沈め、蛭が小島の悴め、鞍馬山の童を初め、片端に攻伏せん。馬に鞍置け物の具せよ。入道年は寄たれ共、保元の弓勢、平治の太刀風、草木も靡かす赤旗を眞先に押立て、三軍心を一致にして、親が進まば子も續け、兄が引かば弟は駈けよ。主が討れば下人は飛超へ、先陣討れば後陣が乘越へ跳越へ、隙をあらすな息つがすな。無二無三に攻め入らば、秋津島は扨置ぬ、鬼界高麗白濟國、南蠻北狄殘りなく、平家の下に附けん事、案の内に覺へたり。小松が別れ悲んで、心落すな臆するな。勇めや勇め一門」と、中門の歩の板、どう〳〵どうと踏鳴し、物に狂ひの勢は、惡魔天魔邪魔心魔、四魔の首領の僧正坊、大天狗の所爲なるはと、鼻にあらはれ見へにけり。

蛭が小島の悴―頼朝の事
三軍―大軍
白濟―百濟の國
四魔―蘊魔（隨逐義）死魔（奪命因）天魔（障義）煩惱魔（與三死生衆生作障礙故）（釋氏要覽）
源は淵れて云々―源氏衰へて支離滅裂なるに喩ふ
鳥羽玉―暗き意にて人目も暗き

第二

源は淵れて埋れて濁江の、水に離れし魚とかや。源氏侍方々の、底の藻屑に身をそばめ、何時世の中に這ひ出て、甲を乾すべき知邊なき、龜井六郎重清、畫は人目も烏羽玉の、小行燈さへ身の油、荷い賣する身代は、吹ば散てふ細流砂、「蒟蒻豆腐の鹽梅よし、

し行澁も暗い身の油―働いて取りたる所得　豆腐云々―豆腐田樂の加減がよい　四十八事―彌陀の四十八願　阿彌陀の光―阿彌陀圖をひいて買うてくれぬか　高塀―高いにかく

鹽梅よし」とぞ賣歩く。「アヽ今夜も月は八ツ前、扨も賣れぬ事かな。蒟蒻は今夜喰いでも明日までも置るゝが、豆腐が廢る。一丁を廿四に切、二丁で四十八串、彌陀の誓願アア何處ぞに阿彌陀の光りはせぬかい。賣て退けたいな。ムヽ南無阿彌豆腐なまいだ。あなむあいだ」仇口念佛高塀より、若き女の顏出し、「是おじやつたか。宵からたんと待焦れた」と、忍びやかに呼はる聲、亘「あい〳〵。ずんど燒立味噌べつたりのぬく〳〵、頤が落まする。十串計上ましよか」と、いへば女は「アヽ煩さ。違ふたけな」とて入にけり。亘「ヤア聞へた。爰は清盛が妾共を置對の屋の裏と聞。清盛の古入道が、鹽銷頭に喰厭て、生好魚むいたづら女、念佛合圖の男引入れ、何でも能い慰」と、打仰向て「なまみだあゝ南無阿彌陀、南無阿彌陀ぶ」と張上れば、以前の女「是々來てか。何として遲かりしぞ。待ほうけに氣が盡た。爰へ〳〵」と小手招き、さし心得て、亘「アア待身より待たるゝ身の、千々の思ひを御すもじ、宵から賤が魂は、拔て其樣のお袖に」と、思はせ振の詞つき。玄「エイいやらしい何んぞいの、てんがうも折による。コレ是に大事のお形見有」と袋一ツ投出し、「見咎められてはむづかしし早ふ〳〵」といひ捨て、女は隱れ入にけり。龜井案に相違して、必定是は盜み物。後の難義に成まいか。何

生魚―若い男　もすもじ―御推量　てんがう―いたづら

螺鈿—貝の類
繪小結—小形
鞘將束—鞘結束
空鞘—刀を佩く
に鞘の先を高く
する
二合半—奴が一
日の給米
二佛—昔細川玄
旨の召使に大佛
といへる中間僧
となりしをよめ
る狂歌、大佛頭
を剃りて又佛是
ぞ二佛の中間の
果(俚言集覽)
愚を師ふ—愚に
きる

うか斯うかと分別袋、口を解けば螺鈿の手箱に、横笛一管小結の烏帽子、五色の糸にて樣々の、縫物したる直垂、大口共に疊みこめられたり。馬「いか樣よし有公達の御將束、不思議に我手に入る事、武運開けてよき大將、主に取るべき端相」と、歸り支度する處に、赤銅鐔も物錆て、雲の空鞘剝廻り、月山の端に二合半、もつさう頭の奴が聲。「南無陀ぶ南無彌陀、南無阿彌陀ぶ南無阿彌陀」塀を見上て高念佛、立留りては又念佛、是ぞ二佛の中間なり。中「是鹽梅よし。我身が樣に此處を念佛申て通つた人はなかりしか。彼の高塀から女中などは見えなんだか」馬「されば〳〵、私先程ふと念佛申たれば、塀の上より美しゐ女中が、なふおじやつたかとぬつと出、ハア違ふたとてぬつと引込み、それより念佛申人一人も通られず。此方の念佛待てそふな」と、なぶるも知らず打頷き、「なまみだぶ〳〵、なまいだ〳〵、〳〵ア、喉が痛ゐ、湯はないか」馬「いや〳〵湯も茶も仕廻ふた。唐辛味噌は有けれど、是では咽て堪るまい」と、賣物擔げ逃んとす。中「是待て〳〵」と引留め、大事の手筈の念佛、一人の聲は屆かぬそふな。同音に申てくれ。恩に請ふ賴む」といへば、馬「お安い事じやが、宗旨が違ふた御免あれ」中「そふはいはせぬ、たつた今念佛申たではないか」馬「いや只今は魚食ふて口が生臭い。明日來て申

て進ぜふ」と駈出る、朸引合て袋どうと落たりけり。中「扨こそ〳〵先へをのれが仕てやつた。いきがたり奴」と云すてゝ、抱へて走るを引たくり、亘「をのれこそ横取の、とつこの革。朸の背打頂くか」と、振上れば、中「ヲヽサ如何なりとせい。身が旦那はらう人。母御よりの御形見、命かけて大事の物、戻して旦那出世の後、きつとお禮に預るか、無理取して首を切らるゝか、勝手にせい」と怯まぬ躰、龜井も流石心憎く、「ムヽしかとそれが定ならば、袋の中に何が有、いふて見よ。違はずは其方にくれふ」といへば、中間ちつ共臆せず、「それを知らいで能いものか。青貝蒔繪の手箱に、小結の烏帽子、笛一管、五色の糸の繁縫の直垂大口有筈。何んと違ひは有まいが」亘「ムヽ然らば笛は如何樣の笛なるぞ」中「ヲヽ吹けばひゐ〳〵鳴る笛よ」亘「ヤイ鳴らぬ笛が有物か。竹の恰好いふて見よ」中「されば竹は漢竹、節込て蟬の形に小枝を切て殘されし、是に違ひは有まいぞ」亘「然らば直垂大口の縫の模樣は何々、地は何色」と問ひければ、中「ヲヽいふて聞せん、よつく聞け」

朸―天秤棒
とつこの皮―獨鈷か、僧の分別といふに用ふ（俚言集覽）
心憎く―奥床しい

模樣盡し

呉郡云々—昔呉國より渡りし綾
山鳩色—黄の濃き色

三國一の云々—
鷲嶺の釋迦

車に螳螂—以螳螂之斧向隆車の意をとれり

ませ—小くして才勝ちたるもの

「其直垂は紗綾綸子、緞子襦珍の類ならぬ、呉郡の綾のもと渡り、山鳩色に薄紅まぜて、さつと一刷毛、はかせかけたる八重飛白、八色五色の組糸にて、十二の菊綴、四つの紐付、蜻蛉結び蝶結び、雌蝶雄蝶の翼を學び、番ひ結びに結ばれたり。右の肩の折目より、左の袖の端れ迄、鞍馬は大悲多門天、加茂の御社、糺の森、貴船、松の尾、梅の宮、高きお山に愛宕山、麓には三國一の釋迦如來、蔓を竝べし景色を、手を盡し氣を盡し、上手を盡して縫れたり。脊筋に源氏の産土、岩清水正八幡の宮所、赤の鳥居は赤き糸、瑠璃の玉垣瑠璃の糸にて縫るゝ、百八間の廻廊に、廿四孝八景の彫物を移して、一ト間〳〵に金糸を入、鷺に澤瀉葡萄に栗鼠、車に螳螂、きり〳〵桐壺、帚木、若紫、是も源氏の壽の、御代を祝ひて縫物せり。腰に綠の千本松、白鳩千羽、雛鶴千羽、竹の小枝と子の日の松、ひつくはへ〳〵、梢々に巣をくふ躰。源氏の白旗百ながれ、平家の赤旗百ながれ、威勢を爭ふ山嵐、神風山風沖津風、平家の赤旗さつ〳〵、吹拂ひ吹纏ひ。八重の鹽路に引汐の、浪間を照す白旗は、朝日と輝く雲の色、金銀の糸にて縫はれたり、大口袴の裙の縫い、唐の猿も千疋、日本の猿も千疋、唐土の猿は大國にて、尾を長く色薄く、形大きに縫れたり。日本は小國の、顔をませ〳〵ませの小猿の、ずんど小猿の猿

猿々々、こけ猿小猿が、唐と日本の汐境、ちくらが沖の、沖の小島の、波にしよぼ濡て日本の方へ、越すを越させじ、越さん越させじ我慢の相、天下分日の軍を學び、針目正しく糸筋清く、縫ひ仕立たる直垂を、我朝にて著る人は、我等が主人ならずして、又と二人有べきか。サア渡せ」とぞ申ける。龜井一々聞に付、「是八幡の引合せ」と、小聲に成て、「扨覺へたり申したり。お主と申は源氏方の由緣よの。我は紀州熊野の住人、龜井の六郎重清といふ、代々源氏の下人筋。主君と賴むお方あらば、引合たべ」といへば、喜三太悅び、「ムヽ聞及ぶ龜井殿か。我等がお主と申は、義朝の八男牛若君、御母常盤御前を、清盛入道害せんとの催しゆへ、此所を忍び落ち給ひ、此御形見を若君へ屆け申せとの相圖にて、扨こそ斯樣の次第なり。君は近日奥州へ御下向なり。追付跡より下り給へ。某は喜三太と申お馬取、豫て御披露仕らん。先それ迄は穩便に。其儘其商ひして、豆腐に串をさす共、腰に刀は指すまいぞ」と、袋擔て別るれば、龜井悅び打頷き、「兎角御前は能い樣に。追付下つてお目見へし、多勢の軍兵勢揃へ、打て上る程ならば、主と下人の鹽梅よし。源氏の運は鹽梅よしの、豆腐の豆のさや」か成、月に別れて三重歸りける。戀塚を、隣に住ば藁葺の、燒餅茶屋の妹脊迄、色を酌茶の女夫合、夫は京へ小商ひ、

八幡—源氏の氏神

穩便—もとなし

さやか—夜にかく

戀塚—鳥羽にあり其隣の茶屋も

其縁にて愛嬌ありと也

もかた―も嗅

こつちり―情の濃なると濃い茶

頭陀―梵語、抖擻と譯す苦行して煩惱の塵を拂ふ義

鉢々―ハッチ坊主の物請ふ詞

草鞋も妻が手作の、情の鼻緒足輕く、朝夕飛で鳥羽の里、名所は人の氣も優し。未だほの〳〵の朝霧に、牢人めきし旅人「なんとおかた茶は未だ有まい。素湯一ッ所望」と、床几に腰を懸ければ、「成程お茶も沸ました、酌で上つて下されませ。私が亭主は朝茶好き。毎夜京へあき内に戻り〳〵呑では、いかな宇治の極上も、嗅が茶には及ぬと、女夫の中のこつちりの、出花を上つて下さんせ」と、小じほらしげにあいしらふ。牢人「ムヽ扨は御亭は留守か。聞けば清盛入道、後白河の法王樣を、此鳥羽の北殿とやらんに押籠置しと聞及ぶ。お内義の才覺で、法王の御有樣、ちと拜む事成まいか」といひければ、嗅「いかな〳〵番に番嚴しく四邊へ參る事叶はず。去ながら、此度小松の重盛隱れ給ひし菩提の爲、此鳥羽の里日に一遍、頭陀の修行なされたきとの御願ひ。放逸無慙の清盛も、我子の別れに心和ぎ、七日が間は一遍づゝ、鳥羽一在所の内計、苦しからじと許し參らせ勿躰なや痛はしや、御法躰とは申せ共、十善天子の御身にて、我等風情の門に立、鉢々と宣旨有。殊勝共痛はし共、涙にくれて染み〳〵と、拜みし事もさふらはず。追付御幸の時節故、此草鞋を捧げん爲、急ぎ作り候なり。あれ〳〵彼へ見へさせ給ふぞや。必それと知らぬ顏、常體の鉢開き同然の挨拶」と、知らする風の秋の山、たどろ〳〵と御幸

成。頭陀の袋麻衣、鐵鉢を御手に据へ、八ツ目の草鞋召るれば、二人の内侍鳩の杖、網代の笠を携へて、昔にかはる御共人、賤が門々〳〵「鉢々」と宣ふにぞ、主の女「進ぜましよ」と貧女が一錢手の内の、片搗麥を御鉢に受、法「三寶供養六道の、有緣無緣」と御回向有、戴き給ふぞ痛しき。旅人も態と知らぬ顏「近比殊勝の修行者、僅の報謝致し度し。受給はんか」と云ければ、法王聞召「さん候。四分律に十二の頭陀を說かれたる。中にも次第乞食とは、長者をも親まず、貧者をも厭はず、次第〳〵の門竝を、請ふて通る法なれば、如何にも申受べし」と、仰も果ぬに旅人、肩に懸たる革籠を開き、重たそふ成一包、御鉢の中へ入れんとすれば、法「ア、是は重たげ成御施物、金銀でこそ有らめ。不作餘食と申して、一時の食の外とては、受ぬ頭陀の法ぞかし。只一錢一粒の施しあれ」と宣へば、修「修行の法は兎も角も此金子三千兩、御僧の外余の人に施す金にて候はず」と、云捨て駈出る。「留れ〳〵」と内侍達、呼ぶ聲耳に聞入ず、田の畦傳ひ逃て行く。折しも龜井はあき内より戻る處を、女房「是此方の人、あれ捕まへさつしやれ」と、呼はれば龜井「まつかせ」と、畠も畦も踏荒し、彼方此方へ追廻し、難なく追詰め「どつこい遣ぬ」と引据ゆる。旅「ヤア尾籠千萬、何あやまりに斯く聊爾はするぞ」と、いへば女房

八ツ目の草鞋―乳の多きわらぢ　鳩の杖―鳩は咽ばぬ故老人之を用ふ　貧女が一錢―貧女が一燈の誓をとる

四分律―佛書六十卷あり　十二頭陀―頭陀の行法に十二種あり乞食は其一なり　不作餘食―餘食をなさぬ、飜譯名義集に食四、一乞食、二不作餘食、法、三一坐、四一揣とあり

まつかせ―よしきた　尾籠―をこの音、無禮

おきく—起きるや否や

なめ過た—無禮極まる

二百十日云々—二百十日は厄日なれども風吹かぬ事もあると同じく密夫の科料も三百匁とは限らぬ

輕—噂の訛か

八性氏—八庄司

被管—家來

三所—本宮、新宮、熊野

遙に、「あやまりないとはいはれまい。今朝おきく〳〵にひよつと來て、茶一ッ呑だ計に、合點の往かぬ金突付、人が何んの請取らふ」と、喚くを男は半分聞、「そりや見たか。男の留守に女房の寢込へ仕懸、噂が出花を能ふ呑んだなあ。なめ過た銀で濟そふや。二百十日に風は吹かず。噂が出花の相場が何時三百匁に極つた。サア失せい」と引摺て、立歸れば、法王御覽じ、「ヤアさなせそ〳〵。其者聊か科はなし、法に過し施物を歸さん爲よ。如何に旅人、愚老が一鉢は、其日の餓を養ふ迄、明日の貯へ何にせん」と、立去らんとし給へば、龜井は「あつ」と怪訝顔、旅人は手を突き頭を下げ、涙を流し居たりしが、蓋「一天の君に向ひ奉り、申も輕多けれ共、某は紀劣熊野の八性氏、鈴木の三郎重家と申。平家の被官にて御座候。扨も小松の重盛、「平家の運命末危し。憂恥を見ぬ其中に、命を取て給はれ」と、三所權現に命請し、卯月初めに熊野參籠有し時、某を密に招き、「父の入道天命に背き、法王を鳥羽殿に押籠憂目を見せ奉る、冥罰子孫に及ばん、淺ましくも恐ろしし。我死して後、黄金三千兩、法王へ獻上し、貧苦を慰め參らせよ。世間へは此黄金、菩提の爲唐へ祠堂に渡すと披露して、賴むは汝一人。深く包め」と申されし。此鈴木めを人と見られし小松の遺言、草葉の蔭にも腑甲斐なく、且は小松が寸志

松柏の云々―世亂れて忠臣の操を知る、歲寒然後知ル松柏之後凋（論語）
出々―どれ〳〵
宿紙―すき返しの紙

の忠義、遂ぬも便なく候へば、御傍の上臈達、御取次下されかし」と、身を投伏て奏しければ、龜井、扨は幼少より、別れ育ちし兄なるよと、女房に目配せし、小首をかたぶけ聞居たる。法王御手をはたと打、「松柏の萎むに遲るゝとや。諸木の霜に枯るゝ時、松の常盤は見ゆるぞや、小松が忠義顯はれたり。それには似ぬ淸盛一家が不忠不義、天下の煩ひ國土の憂へ、疾に亡すべかりしを、小松に免じて助けしなり。出々平家誅罰の院宣をなすべし」と、內侍達の懷中の御硯宿紙にて、宸筆の院宣薄墨に遊ばし、芒「義朝が末子牛若、京近邊に有と聞。此黃金は軍の用意、共に鈴木渡すべし」とて給びければ、鈴木飛退去り、「宣旨背き難く候へ共、某父方は鈴木にて平家の被官、母方は龜井を名乘て源氏の下人筋。さるに依て、親にて候鈴木の庄司、一人の弟を幼少より引分け、母方へ付置、今にも源平軍となれば、兄弟しのぎをけづる中、亡びかゝる平家を捨て、末榮べき源氏に從ふなどゝ笑はれては、他人よりも恥し。七才に成忰を連れ。平家の味方に參る某、院宣の御使は余人に仰付らるべし」と、申捨て駈出る。龜井走りかゝつて引留、「ハテ又しては〳〵、びち〳〵跳る鈴木殿、尾鰭を付て生臭い云分めさるれど、くだらぬ〳〵。もと法王樣は平家滅さんとなされしゆへ、斯く押籠れおはします。然れば平家

鈴木―鯉にかく

の大敵は法王樣。それに金をあてがい、敵の城へ兵粮籠ながら、源氏に附ては弟のさけしみが恥しいとは、理の詰らぬ云分。頭は鈴木尾は江鮒。跡先揃ぬ」と、かゝら〳〵とぞ笑ひける。鈴木氣色を損じ、はつたと白眼、「ヤアぼて振の賣人め、弓取の法は知るまじい。弟龜井は侍なれば、汝等が推量とは雲泥萬里。其處立去れ」と睨付る。「イヤ是賣人も人による。彼の行燈の書付を御覽ぜ。ずんど心底の鹽梅よし。さらば其弟の龜井に、此鹽梅よしが成かはつて問答せば、一言も開せじ」と、布頭巾取て捨て、朽腰に脇挾み、膝立直して、「是兒じや人、鈴木殿、僅二人の兄弟を、源平兩家に別け置れし父の心を御存じか。子を思ふ親の慈悲、我子で思ひ知り給へ。傾く平家に從へて、兄弟が鬢れもなく、やみ〳〵と骸を曝し、孫の命も有まじと、子孫の絕ゆるを悲み、末繁昌と見へ渡る、源氏へ龜井を付られしは、兄の鈴木を見立よと。いはぬ計の親心、痛はし共、有難し共、推量なきは不孝人。親を學ぶは子の作法、七歲の男子を平家方と名付置、御身源氏へ忠功あらば、其子も命助かつて道も立子孫も立、孝も立家も立ッ。勅命に背き、平家に荷擔人し給はゞ、其身は申に及ばず、七才五才もいはせばこそ、胎内迄子孫を斷れ、親の墓も引毀たれ、道も立ず、名も立ず、家の名字を絕やさんこと、不孝の罪の第

ぼて振―擔ひ賣の商人

從へて―原本のまゝ

やみ〳〵―みすゞ

七才五才―幼少なりとて容赦せず

一なり。弟は源氏に身を立て、兄の身命はたさせ、龜井が嬉しかるべきか。曲もなき鈴木殿、慳貪成兄上」と、引寄せ〳〵縋付「まづ此如く本の龜井が悲まば、何と返答し給ふ」と、詞は他人向なれど、涙ぞ誠の涙なり。鈴木横手を丁ど打「ハヤあやまつたり〳〵。院宣の御使して、兄弟諸共源氏方、牛若君に從ふべし。汝が諫を聞に付、さこそ龜井が恨むべき。懷しさゆかしさよ」と、そどろに涙を浮ぶれば、龜「なふ左程に慕ひ給ふかや。何をか包まん我こそ龜井の六郎よ」鈴「さては弟の重清か。母の名字を繼だれば、御分は母の形見ぞや」龜「父の名字を繼給ふ兄こそ父の形見ぞ」と、兄弟ひしと抱付、聲も惜まず泣ければ、女房も涙にくれ、供奉の内侍、法王も御衣の袖を絞らせ給ふ、叡慮の程ぞ有難き。斯て龜井は牛若の御所在、喜三太が口移し備に語り、片時も早くと勸むれば、鈴木も御暇申せしが、立留つて、「思へば〳〵小松殿、平家に向つて弓引けとて、此重家は賴まれまじ。苔の下にて亡魂の妄執も痛しし。院宣の御使して源氏の味方に參る共、源平兩家の戰の軍の御供は仕らじ。後れたり臆病と、後指をさゝばさせ、其代りには牛若君の御行末、若し一大事のあらん時、千里も厭はず馳參じ、腹十文字に搔切て、冥途のお供仕らん。それまでは重家が生國藤代に引籠り、軍に出ねば身は農人、太刀刀無用

なり」と、するり〳〵と拔放し、石に打當段々に、打折てからりと捨、「是ぞ冥途の小松殿へ、二心なき未來の忠義。此お使は牛若君に現世の忠義の始めぞ」と、守袋の紐を解き、院宣納め首にかけ、叡慮を伺ひ立出る。兄は正直順路の武士、形一ッを源平兩家、現世と未來の忠義を立、弟は孝行武邊の勇者、心一ッを父と母、兄と君とにたゞせりと、叡慮深く還幸有。名も水に住む龜すゞき、魚と水との如くなり。

すゞき—鈴木と鱸　魚と水—仲善き事（蜀志諸葛亮傳）

第三

扨も三條の吉次信高とて、黃金を商ふ商人ありて、毎年數多の寶を集めて、高荷を造つて奥通ひ、次第に家も富の小路、三條表の檜木見世、平家の御用菊月の、今日を嘉例と馬方に、半金渡す錢拂ひ、數多の手代が、覺帳、八十八駄の馬追に、祝義取らせて旅立は、東の空や逢坂の、赤飯蒸して酒肴、隣町迄も賑れり。多くの中に十六七の馬追の、人に勝れて目の中も、くり〳〵栗毛の馬追ふて、小利發氣に立廻る。片意地の長八不思議そふに見廻し、「やい若る者共、此處なこぢよく奴を知たか、終に中間で見馴ぬ奴。まごとしそふな態をして、二百里に余つた奥州、半分道も往ず、所勞ぬかして、人に厄

賑れり—賑へり　片意地—頑固　こぢよく—小わつぱ

介かけるは定。中間の邪魔じや差換い。馬の町か日野岡か、先駄賃借たら戻して、はや出て失い」といひければ、牛若「我等は北山二の瀬村小冠者といふ馬子。日外吉次様、流馬詣に片道此馬に召し、其時よりの約束で、奥へお共は致せ共、目利の通馬追ふことは無巧なれど、其代りに東路の垂井、青墓、赤坂邊、夜盗強盗多しといふ。例へ今音に聞、熊坂の長範でも、何百人でも此童、只一人に押向て、何れもは怪我せぬやうに、足早にお逃〳〵。其時は各〳〵の命の親の此童、留れならば留らふが、後悔召さるが笑止な」と、店前に高腰懸け、揚足してぞおはしける。長「ヤアほてがくねるはい。小意氣過た前髪奴、摘み出してくれふ」と、肱を張ば馬方共、「よいは〳〵、腦は憎けれど、若衆が能い堪忍せい。盗人こなすと自慢こく。待て晩の泊に寢處へがんだうつて、やじりきつてくれふぞ」と、一度にどつとぞ笑ひける。かゝる所に瀬尾の太郎兼安「六波羅殿の御用有。吉次は未だ發足なきか。面談せん」といゝければ、手代共飛で下り、「その段申聞すべし」と、見世の上にぞ請じける。吉次奥より揉手をして、「ハアお出で御座ります。御所は昨日お暇申、跡の御用は手代共、承るはづ成にお氣遣し」と申ける。長「いや〳〵氣遣な事でなし。上に目出度い事あつて、御用仰付らるゝ。御手前も存じの通り、源氏義朝が後家

御共―御供

ほてがくねる―可笑くてたまちぬ

こなす―打ち潰す

がんだう云々―強盗に入る、屋尻に尻をかく

常盤御前、入道御妾にそなへられ、御寵愛有しに、此常盤欠落し、方々詮義遂げたれば、常盤が父梅津の源左衞門方へさまよい來る由、則父が訴人にて有所詳しく知れ申た。なふ吉次御聞やれさ。入道殿お年は六十四才で、御氣精強い事ではないか。常盤御前は懐姙有、當月が產月。阿部家の博士勘へて若君と占い、御老後の御男子平家繁昌の瑞相、殊に去年小松殿御逝去に、當年常盤の男子懐胎、疑ひもなく、小松殿の生れ替りなるべしと、大方ならぬ御悅び。御誕生の御祝義は、御惣領同然と仰出さるゝ。然れば御一門諸大名獻上の太刀刀、百ふり計吉凶を選んで名作を用意召されふず。馬代の金銀卷物類、さあといふ時御用に手支へなき樣に、御誕生過る迄奥州下りも延引あれ。假初ならぬ大事の御用、ハテ產落して明き腹の、常盤は死んでも構はぬ事。腹に御子の有中は母の身とても疎ならず、守よ札よ產婆のと、我々が忙しさ推量あれ」とぞ語りける。吉次横手を打て、「これは〳〵お目出度い。いや當年は老人の子を產する年やら、此隣町に道庵と申、六十九に成吝嗇坊の隱居が、玉といふ飯焚にたつた一夜忍んで、淺黄小紋の布子を、やす〳〵と玉が產ました」と、當座の興を催ほす所へ、六波羅殿の徒士目付、あはたゞしげに、「ヤア瀨の尾殿、未是に御入か。常盤御前誕生の事、散々の次

阿部家―安倍泰親、陰陽博士の家

徒士目付―德川時代の役なるを

第にて、御祝義も獻上も無用になされ。吉次にも其通り申渡されよとの仰なり」とぞ申ける。手の裏かへす平家の掟、例の事とは思へ共、吉次も不審晴やらず。瀬の尾太郎驚きて、「シテそれは小産ばし召れての事か」といへば、徒士「いや〳〵左樣の事ならず。常盤が源氏に心を殘し、惡緣にて平家の子を懷姙せしは是非もなし。安々と産落し、平家の子孫蔓らせ、源氏に對し道立ず。毒を服か、腹に刃を突立て、我身も共に死んと申。威し賺しつつ致す内に、既に帶を解んとす。清盛公御立腹甚しく、先高手小手に搦めさせ、今日中に洛中町小路を引渡し、親源左衞門が家の前に、門磔にかくべしとの仰にて、其支度急々なり、お歸り候べし。ヤよい處に馬方共、常盤を乘せて引渡す、巖丈なる馬一疋、引て參れ」と云渡す。牛若はつと肝に泌み、何ゝ條母を引渡させ、罪科に逢せ置くべきか。六波羅に切入て、何ゝ十萬騎も切散し、母は人手によもかけじと、思へども「待てしばし。母の浮目を見給ふも、我を助けて、父の仇を討せん爲。運盡て仕損ぜば、父母の敵を討ぬのみか源氏の瑕瑾。奥州の秀平が短慮なりとさげしまん。如何はせん」と、吉次をきつと見給へば、吉次も氣色見て取て、頭を掉て目まぜの躰。急き來る心押沈め、胸に涙を包まるゝ、千々の思ひぞ哀なる。馬方共聲々に、「科人渡す役馬は、我人

遂に用ひたり、今の晉部

小産―流産

浮目―憂目、以下皆同じ

秀平―鎮守府將軍藤原秀衡

我人―我も人も

戮丈―強き

いやがり申ゆへ、何時とても馬さし方にて、天道次第の鬮取に致す事。馬さしに仰付られかし」と願へば、瀬尾、「急成御用に何の馬さし。是にて鬮をさせられよ」「承る」と徒士目付、人數に合せて細縄切、「サア長きに當るが役馬ぞ。寄て引け」と出しける。「いや我等は仲間はづれ、二の瀬村の在郷馬」牛「是馬子衆、此冠者は鬮を除てたも。賴む〳〵」と詫給へど、馬「ヤア 溫な、賴むとは何の口で。ちと利口振出さぬかい。ならぬ〳〵鬮取れ」と、皆立かゝつて、「南無鬮取大明神、短を取らせたび給へ」甲「大黑賴んで、どれ取ろぞ。ハア短いは 忝い」乙「此方も短い有難し」と、戴き〳〵立退く人も多き中、母の罪科や罪障の、山鳥の尾のしだりをの、長きを取るぞ是非もなき。馬「そりやこそ冠者奴があたつたは、能い氣味な。科人の馬追ふて、夜さり首が咽笛へ わんといふて嚙付ふ」と、實にも野人の心なさ、哄動をつくつて笑ひけり。瀬尾の太郎聲を荒らげ、「サア鬮は極つたり。參れ〳〵」と責ければ、力及ばず 牛「あつ」といふ、聲の中にも正八幡、諸佛諸菩薩、別しては鞍馬の大悲多門天、日比讀置く御經も、現世後生も父母に、二筋引し法の綱、今は母上片口に、引て出たる駒の綱、縋るゝ心ぞ 三重 いたはしや。

在鄕馬―前の緋衣を馬に對して云ふ駑馬

溫な―甘い事吐す

大黑―梵語、弘法鬼子母神の前にて鬮を採るに梵語を賴めり

命三つある—常盤と腹の子と牛若との三人の命一つは止る—牛若の事

我は連行—母を三途川に連行く

押搦—惜したのも—頼む

こんかき—紺屋、袈は紺衣を着せし下郎

露の繻虫

命三ッ有親と子の、中に一ッはとどまれど、二ッは今を最期場の、羊の歩み引かへて駒の歩みや鞍底に、身を柵の立田川、繩目〳〵は紅に、しめ付られし後手に、爪繰る數珠は今死ぬる、我後生より菩提より、馬の口取子の行衛、末安穩と見下せば、子は又母の成佛と、見上る涙眼に漏て、警固の武士はあらけなく、「急げ〳〵」と追立られ、泣く〳〵引つ引れ行く、親子の中の歎きには、上越す哀ぞなかりける。引るゝ町は何處〳〵ぞ。上は一條今出川、歌　袈は何處ぞと、馬子衆に問へば、死したる親も祈りの奇特、再び娑婆に戻橋、我は連行く三途川、出水通を引過る。跡のしるしとなりはせで、此身の果は風に散る、柳の馬場と聞からに、浮世の名殘押小路、とわたる鳥の聲聞ば、名も懷しや哀我、ときはの國の友ならば、後世を田面の鴈金に、戒名か文字言傳ん。佛の御手の善の綱、二條三條これとかや。昨日は袖にかざしぬる、錦の小路亡き跡の、旗に縫へとや綾の小路、四條五條の橋の上、老若男女聲々に、「科人あり」と立集ふ。紺かき下部高聲に、「法を破りし非科人、みせしめ成」と呼ばる聲、耳に堪へて淺ましく、當憐み

給へ人々なふ。みづからが科とても、盗みとては致さず、人を殺せし咎もなく、況て仲言僞りせず。妻は源氏の左馬頭、名は義朝と申人、形見の胤の子を持て、今歳は既に十六才、其子を慕ふが曲事とて、斯る罪科に行はるゝ。子のある方は推量有。子達は親を思い遣り、歌念佛すゝめたび給へ。南無阿彌陀ぶ」と稱ふれば、知るも知らぬも念佛の、聲高倉を引渡し、とても骸を暴す身は、爪嘴にかくるとも、惜まじ野邊の烏丸、惜みても厭いても、誰かは一人留まらん。果は烟の室町や、洞院小川はや過て、子に引るゝと思へ共、地獄を急ぐ道なれば、乘たる馬は火の車、汕の小路堀河の、水は淀まず中々に、淀むは駒の足竝や、「はい叱い〳〵」と鞭あてゝ、口には追ふて心には、涙の手綱引留め、引留むればさすが實に、馬も生あるしるしとて、歩みなづみつ行惱み、黄成涙を流すれば、草木も哀知りぬべし。此處ぞ猪の熊大宮の、辻を廻れば有難や、西にぞ壬生の地藏堂、六つの衢を導きて、慈悲を知邊の錫杖も、杖も及ばぬ警固の杖、追立〳〵引渡す。駒の追風秋の風、末は朱雀の野邊の露、脆き命ぞ三重末ちかき、身の成果や梅津の里、源左衛門が家の前、樗の立木を其儘に、枝を打て科人の、がう木の柱と定らる。廻りに抜身の鎚長刀、數百本整々と夕陽に輝けば、此世から成劔の山。檢使には難波の次

高倉—高し
嘴—鳥のはし
歩みなづむ—行き渋る
がう木—磔柱

郎經遠、下使の下部、穢れの人歩、したり顔に玉襷、「犯人遲し」といふ奈落、牛頭馬頭の阿防羅刹、惡刼無盡の罪人を、待も斯やと恐ろしく、見物貴賤身の毛を立、皆々涙を流しける。「すはや是へ」と先拂ひ、「立つまい〳〵先退け」と、鐵鞭鳴し振廻す。罪なき罪に沈むこそ、前世の報ひ重き身を、乘せたる駒も口取も、共に涙の足重く、しどろもどろに行惱み、古鄕戀しも引かへて、悲しや親の家の前、最期場にこそ成にけれ。下部の雜人あらけなく、鞍詰の繩解て、常盤御前を抱下し、木の根にどうど腰引据へ、「此處な馬子奴はめろ〳〵吠て、しかと馬を追もせず、道に隙取日も傾ぶく、最う用はない、歸れ〳〵」と睨付る。牛「御尤〳〵。去ながら我等は金賣吉次の馬追冠者、東下りの門出に、行懸り不思義に闖に取當り、常盤御前の御最期の、御馬の口を取事は、嘸や三世の宿緣と、思へば涙留まらず。高きも卑きも世のならひ、親の死したる葬禮の、輿に其子が手をかくる、是もそれにかはらねば、前の世の親と子が、馬子と生れて葬禮の、輿に手をかくるぞ、と思へば今も母上樣、如何に宿緣なればとて、母を高手に縛めて、罪に行ふ馬の口、子が引渡す因果の程、昔が今に至る迄、そもや例しの有べきか。今宵より精進し、讀み奉る御經が三途の河の船と成、死出の山には馬と成、多門持國に口取られ、佛

奈落―地獄にてなるはにかく
阿防羅刹―獄卒にて剛鐵劍を持つ
鐵鞭―金棒

多門持國―四天王中の二王

土に參りおはしませ。余りに名殘惜ければ、今はの際も見屆けたし。今暫し此冠者を、是に置て下され」と、檢使の前に平伏て、搔口說き泣給へば、難波の二郎も感じてや、暫時とてこそ許しけれ。常盤は目をも泣張し、顏も擡げずおはせしが、「能も優しる詞をかけ、最期の心を慰むる。自は牛若とて、おことが年配恰好の、いとし子を持たれば、冥途の旅の馬の口、牛若が取と觀念し、縛めの繩も痛からず。最期も淸くするといふ、死での前には元の妻、義朝公のおはすれば、浮世に心は殘らねど、迷ひと成は牛若よ。それがいとしる故にこそ、敵淸盛に身を任せ、年月の物思ひ、傾城白拍子の浮勤めも、是程にはよも有まじ。義朝の御年忌御命日にあたつても、精進破らせ酒宴の友、未來の人まで迷はすは、そもや如何成報ぞや。それさへ有に淸盛が子を孕む。まうし子しても產まず有、女の心の誠にて孕むといふも僻言よ。淸盛に思はれても、良を見るさへ煩くて、夜の襖は釼を抱き、鬼と添寢の心地して、肌を反向け身をそばだて、心とけぬに女の因果、お腹に子種宿りしは、浮目の上の浮目にて、夜は目で泣き晝は胸、涙の絕ゆる隙もなく、十年といふ春秋を、暮かねたる歎きの程、誰にか語り盡すべき。假へ平家の種にても、身に有中は我子にて、牛若が弟なり。產落せば敵と成、成人しては親兄を、

死んでの前—死後
妻—夫
浮勤—憂勤
まうし子—神佛に子を授けられよと願ふ

阿闍世太子―印度頻婆沙羅王の子、外道を信じて父を弑し母を幽して王位に即く　婆羅門王―天竺の外道　水子―嬰兒

大功は細瑾を云云―大功を立つるには小節に拘はらず、大行不顧細瑾、大禮不辭小讓（史記）

父親―孫盛　浮―罰き

討ん切んの血の筋よ。斯る敵を身に持し、母が因果は何事ぞ。異國には阿闍世太子、婆羅門王を子に持し、昔語を聞もする。常盤ならで日本に又と、例しの有べきか。淺ましの身の果や、拙き前世の戒行や。いとしと思ふ牛若は、日影の草と埋らせ、辛しと思ふ胎内の、水子ゆへに浮目に逢ひ、罪科に逢ふは何事」と、牛若をつくゞと見上ては はつと泣き、見下しては哽返り、悶へ焦れ給ひしは、目もあてられず哀なり。母の歎きに堪へかね、「エヽ今は是迄、源の牛若と名乗て出、太刀一ふり奪ひ取程ならば、八方へ切散し、肩に引懸退ん物」と、思ひこふだる面色、常盤それぞと聲を上、「此有樣を牛若が聞付ば、馳出んは必定。おろかさよ〳〵、大功は細瑾を顧ずとかや。母一人を助けんとて、天下の大事を仕損じて、源氏の恥辱を雪がずば、義朝の子とはいはれまじ。今の間に此母は、此木末に梟られ、手足を枝に引張て、釘鎹にて打付られ、鑓先に貫かれ、果は目鼻もとぴ烏の、餌食とならん其苦み、こたゆるも何故ぞ、牛若を世にあらせん爲。天にも地にも萬寶にも、替じと思ふいとをしさ。斯程に思ふ子もあれば、胎内にて殺す子も有。同じ親にて父親に、此苦患はなき物を、何とて惡業がかたまりて、女の身とは生れしぞ。浮物思ひさせんより、はや〳〵罪に行ひて、殺してたべや人々」と、せき上

喘上泣給へば、見物貴賤心なき、警固の武士下部迄、袖を絞らぬ者はなし。歎の中に常盤御前、色替り腹痛み、御産の氣付給ふを見て、警「いざ行はん」とひしめくを、難波の二郎、「暫く〳〵。是は此序に牛若をおびき出し、討ん爲の謀事。腹を裂ても若君を取上よとの御諚、氣の付こそ幸なれ。近邊に功者成、取上婆は有まいか。産後迄は大事ぞ」と　暖簾幕にて周圍を圍ひ、繩を許して木の根の床、兎角しつらふ其間に、産の氣しきつて誕生の、初聲高く聞へけり。斯る處に丈高く、色眞黑成老女、大綿帽子の額より、皿の樣成目を見出し、老「私は花の都で隱れもなき、鐵婆と申大名人の取上婆、産一通りの事ならば、二子、三ツ兒は申に及ばず、逆子、袋子、德利子、跡先膨れて、中で詰つた瓢簞子でも、引攫へて搔出す故、熊手婆共申ますが、お尋に就て參つた。やあゐい」と坐りしは、搗臼直す如くなり。武夫共興覺し、「日外の辨慶が頰の色に生寫し。平産有ての上なれば、歸されかし」とのめく聲、老「アヽつがもない、色の黑いが辨慶ならば、鍋やちやん茶釜は皆辨慶か。平産有ても婆が祝ふが式作法」と、幕の内へ手を差入、赤子引出し抱上て、「ナフ憎々しい能いお子や。惣じて祝ひは逆祝ひ、下々は目出度ふ祝ひ、上つ方の和子樣は、悲しい事の有たけを、揃へて祝へば頭が堅い。出

德利子―頭部に比して下部の大なる兒

のめく―騒ぐ事
のゝめくかつがもない―とんでもない

出―産語

産祝ひ申べし。先御果報は御父淸盛、底意地惡るいど根性。諸人の憎み猜む迄、引まつべてあやかり給へ。力は地獄のがきあみ、御壽命は朝顏の、日影待間の露の身。あら目出度や」と、怪我の良して絞殺さん、隙間を窺ひ捻殺さん、と眼は四方へ付ながら、「ちやうち〳〵、あはゝ、ねん〳〵ころゝ」と嘯しけり。父源左衛門亂れ白髮に鉢卷しめ、太刀横たへてつゝと出、「是御檢使難波の二郎殿、此翁は今度の訴人、常盤が親。物其數にはあらね共、左馬頭義朝が舅梅津の源左衛門正國、妻は桂の宰相、常盤が平家に從ふさへ恨みに存、十年已來親子中、違ふた程痩せ我を張る年寄、慾にめで利に耽り、娘の訴人すべきか。我方にて平産せさせ、敵の子を養育するは虎の子を育つる道理、又いはど我孫なり。虫同然の水子を殺さんも無下の至り。淸盛の老後の子、抱たい見たいは斷り と、子の可愛さを身に覺へ、正しく聟の敵の子、姙婦常盤が訴人せしは、賢を守る源左衛門、道の上に道を立、情の上の情ならずや。仕樣こそ有べけれ洛中を引晒し、親の門に磔とは、おめ〳〵と見て居るべき源左衛門と思ふかや。水子といへ共平の朝臣、郎黨には難波の次郎。折こそよけれ、鑓長刀の鞘はづし、大勢を引連れしは、天晴平家の大將よ。此大將を源左衛門が討とめて、首取樣を是見よ」と、引寄せて刺通し、首打

まつべて—揃へ集めゝ
がきあみ—癩病患者
ちやうち〳〵—子供の戲、手を拍つ事
あはゝ—口に手をあてあゝといふ戲
無下—思ひやりなし
仕樣こそ云々—外に仕方も有ちうに

落してつゝ立ば、難波を初警固の武士、數萬の見物一同に、ばつと驚く計なり。難波腹にすへかね、「若君の御敵、一寸も遁さじ」と、進み出れば武夫共、一度にばらりと取廻す。鬼より怖き鐵婆、綿帽子半ば押除け、「産所の側でもや〳〵と、血が上つては大事じや。やかましゆいふは誰樣じや。婆が此手で片端から、頭をぐんぐと押へて、ちつと沈めて進ぜう」と、馬追冠者も引副ふて、そろり〳〵とねぢ寄たり。難波の次郎齒がみをして、エ、憎くしと思へども、婆めが面相凄じく、馬子奴が眼其意を得ず、膝節顫ひ出けれ共、左あらぬ體にて、「よし〳〵若君は是非もなし。常盤を罪に行へ」「奪「承る」と寄らんとすれば、鐵婆大手を擴げ立隔て、「アヽ輕忽な。七夜の内は横寢さへさせぬもの。彼の木の上に引張て、鑓で突ふと云樣な不養生が有物か。堪るものか堪らぬ物か、心見に難波樣、此方さん上つて見さんせ。どりや嫗が上てくりよ」と、裙捻卷り引窠げ、くはつと踏出す兩足は、松の古木に異らず。難波戰慄き身も縮み、聲も顫へど十面作り。難「ムヽ、尤々。聞屆けぬも侍の。物の哀を知らぬに似たり。七夜立迄相延す」と、云捨て引かへす。考「なふ是々、七夜過て又やかましいはふより、今日埒明て下され」と、追かくれば、難「いや〳〵七夜八夜十夜でも、最早一代構はぬぞ。皆

十面作り―苦々しき顔する

左右―あちせ
はた折―旗
松虫―待
馬追虫―馬を追ふ
屈み鞍―鎖鞍

車を碎く云々―険しき岩深き淵も人の心には及ばれぬ

矢矧の宿―参河にあり、矢を矧ぐにかく

來いく」と引連れて、跡を見ずして逃たりしを、笑ぬ者こそなかりけれ。群集の見物悅びて、皆立歸れば金賣吉次、一散に駈來り、「虎の尾を踏む御振廻、危し日出度し。去ながら此上にも、牛若君辨慶と、人はよもや白旗を上給ふ迄御慎み、常盤御前は人目を忍び、跡より奥へ御下り、辨慶は都に隱れ、秀平の左右を待給へ」と、直に門出の馬負冠者、腰に馬柄扨竹の鞭、窶れ行野の秋の草、連れて音を鳴轡虫、何時か揚ぐべきはた折虫、末松虫の時を得て、馬追虫に屈み鞍、鐙踏張名乘るべき大將軍とぞ見へにける。

第四

車を碎く岩よりも、人の心はさかしくて、船を浮ぶる淵よりも、深きは人の心とて、鈴木の三郎重家は、院宣を首に懸け、御曹司の御跡を慕ひて奥へ下りしが、義を守つてしばしが程農民と成たれば、太刀をも佩ず主從の、見參始如何とて、弟龜井打連て、忍ぶ菅笠みの尾張、三河に架し八橋や、水の源頼む身は、平家を何時か討べきと、常の心に敵を見て、矢矧の宿にぞ著にける。折しも今日は虎の日の、峰の藥師の御緣日、矢矧の長者參詣の、下向道に行逢ふたり。鈴木は一歳ほのかに顔を見覺えて、「是申卒爾なが

ら、矢矧の宿長者殿にて候な。都三條金賣吉次信高の定宿と承る。此度の下向にも嘸泊りにて候はん。十六七の少人を同道にては御座なきか。若し左樣にも候はゞ、逢せて給べ」と有ければ、長者聞給ひ、「さればとよ、信高殿は妾が方に逗留有、東の名所見物とて、氣高き若衆も御同道。左宣ふ人々は、何方ぞや」とぞ答へらる。鈴木兄弟嬉くて、「それこそ源氏左馬頭の殿の若君、牛若御曹司、我々は紀州熊野鈴木の三郎重家、舍弟龜井の六郎重清と申者。後白川の法皇より、平家追討の院宣を蒙り、扨こそ尋參らする牛若君に逢せて給べ」と、心も勇み氣もせきて「早ふ〳〵」と云ければ、長「ァヽ音高し音高し。數年剛染の吉次殿、みづからにさへ明されず、粗忽には如何なり。未だ逗留の筈なれば、御兩人も我方に、二三日も留りて、折を伺ひ吉次殿に申込み、其上には兎も角も、我も人もそれ迄は、知られず知らぬ旅人の、宿かり合せし風情にて、間所も多ければ、ゆる〳〵休息遊ばせや。さらば案内申さん」と、長者は先に手束弓、矢矧の宿へぞ三重歸らるゝ。都に勝る東路や、矢矧の長者の一人娘、淨瑠璃御前と聞へしは、峰の藥師のまふし子とて、瑠璃をのべたる顏形、一人も一人がらなれや、大内育ちに侍きて、若紫の稚立。和歌の道、文字の道、繪も美う花結び、天性琴の妙を得て、百の媚百

粗忽にも云々―むやみにいふも如何と也

手束弓―立つにかく

峯―三河鳳來寺山

一人も云々―たつた一人慢なれば

若紫―源氏の紫上　歡喜苑―諸夫人此苑中に入れば自然に歡喜の念を生ず、起世經に善見城北門の外にあゐ大園林と有り所在―仕事とする　泔水―髮洗ふ水の入れ物

の種、歡喜苑の花の下、錦華帳の月影に、明て三五の春秋を、人に戀られ忍ばれて、戀しと思ふ人は未だ、持初て見ぬ閨の中、御寢の物の重ね著に、枕一ッの丸寢こそ、何に不足はなけれ共、物足らずなる寢覺なれ。秋も中旬の荻の聲、籠飼の虫の色々に、音をそめ出す萩桔梗、むら〳〵薄の露ごとに、映る月かと見る迄に、立並べたる鏡臺は、伊達を所在の女房達、淨瑠璃御前の夕化粧、其役々をぞ定らる。先御乳母の冷泉はおぐしの役、十五夜は額の役、玉藻前は細眉の上手なり。空冴、月冴、千壽の前、白粉油臙脂の役、有明はお爪の役、更科は留伽羅、籬、小衣、そつの助、楊枝手拭泔坏、定めの役役勤めつゝ、淨瑠璃御前は姿見の、十寸見の鏡に對ひ給へば、十五夜、冷泉、衣紋繕ひ參らする。「最ふ能いはいの、何う嗜んでも作つても、見せるは女子計成、身は閨の夜の花ぞ」とて、譬へられても中々に、花も及ばぬ姿なり。斯る折節御曹司、「今宵は父の逮夜ぞ」と、烏帽子將束あらためて、姫の閨共白露の、からてうづ手向草、牛此直垂大口は、母の手づから縫物し、蟬折の一管と、ともに形見に賜び給ふ。何とか成らせ給ふぞ」と、いとど覺束懷しく、思ひの數も千草の露、千五上勺、中六下口八ッの歌口打濕し、父母の手向の樂なれば、夫を思ふ想夫戀、身も日も寒しと謠ひけん、昔覺ゆる風

蟬折―唐山より渡りし寒竹にて作りし名笛　于五上尺云々―笛の八孔の名、歌口吹く所の名

想夫戀—曲の名

篇木の卷—源氏物語篇木の卷の「歌 なちぬ伏屋に生ふる」の歌の意にて數ならぬ賤しき者の義 吹きさし—吹き止める

まんこが玉—萬戸將軍が唐土より渡し〻寶玉まどふ—贋ふ

はしたない—不謹慎な

に、吹合せてぞ三重聞へける。座敷には女房達、笛の音色に聞ほれて、眼を細め身をねぢて、腰もふな〳〵成にけり。姫君感に堪兼て、「面白の笛の音や。殊に天滿天神の、惜み給ひし樂なれば、此祕曲を吹く者は、只人にてはよもあらじ。みづから是にて琴を調べて合せんに、如何にと咎むる人あらば、篇木の卷と答ふべし」と、引寄せて搔合せ、爪音ゆたかに遊ばせば、十五夜、冷泉、太皷篳篥あいしらひ、籬隔つる糸竹は、心も動く三重計なり。牛若笛を吹さして、「斯る東に誰なれば、此爪音の優しや」と、覗き給へば、座敷にも聞失ひて茫然と、まんこが玉の玉琴の、調子まばらに狂いけり。耳を澄して姫君は、「あれ〳〵笛がやんだは。まどふてかやしや笛返やしや」と、御機嫌損ぜし折から、御曹司の面影、鏡に移れば十五夜、「ナフ笛を誰ぞと思ひしに、美しい若衆が、鏡の内にそれ〳〵」と、走寄て姿見に、ひつたりと抱付ば、冷泉も女房達も騒ぎ立、「此鏡には袖が有」「此方には髪の髱計」「此方の鏡は肝腎の、袴の前腰ア、味そふな」と喰付やら抱付やら、顔は上氣の戀紅葉。女護の島の夢咄、男見たるも斯やらん。姫君そどろの御目元、「是はしたない十五夜、みづからが鏡なれば、裡の若衆も妾が若衆。見苦しい此方退や」「本に是は不調法」と、立退く跡に入替り、御覽有間に牛若は、小萩が下の一

かぐろひ―隱るの延言
皆にした―すつかりなくした

村に、立寄る姿かぐろひて、鏡に影はとどまらず。淨「ホウ能い事しやつた。若衆を皆にしやつた、元の樣に入て返しや」と、御機嫌彌々損ずれば、「今迄有しに不思議な事。誰も隱しはしやらぬか」と、噪ぐ人音夕嵐、庭の荻原女子原、漏るや戀の風ならん。牛若さすが奥ゆかしく、禮戸あらはに押開き、立聞給へる御姿、又こそ鏡に移りけれ。十五夜嬉しく、「それ〳〵、御神躰が鏡の内に顯れ給ふ。拜ませ給へ」と御手を取、土「なふ能く見れば、金賣吉次同道有し都の君。御日の張の氣高さ、此の口元のしをらしさ、御肌著の白小袖、押るゝ程の色白、上重ねは唐綾、上品の直垂、此品々の縫物の手際は心も及ばれず。お烏帽子は左折、金作の御佩刀、彼の指振の尋常さ、百萬騎の大將と申ても、怯はせじ。ウヽ〳〵いとしらしるお顏や。ほつかりと喰付たい。御姫樣も我々も、鏡で見たは仕合、直に見たらば今比は氣付が入であらふ」と、ぞく〳〵すれば冷泉「御年は十六七迄は往まい、姫君樣には似合比。十五夜、我々には少とはしからふ」と云ければ、土「アヽ騙つた事計。はしこふてもこそばふても、假へ惡ふて、跡で口が腫ても、身は構はぬ」とざゝめく聲、ほの聞ゆれば牛若は、きやうとくも逆入らず、玉虫拾い玉笹の、露を飼ふてぞおはします。淨瑠璃御前も戀草の、ほの顯はるゝ詞の色、淨「さもあ

はしかからふ―はがゆかちう
玉虫拾ひ云々―手持無沙汰でうぢ〳〵する體
押さるゝ―負ける

れ此君は、源氏方の御由緣と覺えたり。いたはしや御代ならば、斯く輕々敷有べきか。苦しからずば少時が程、街宮仕へ申たし」と、思染みたる御顏ばせ冷泉見て取、「なふ十五夜、何とぞ彼の笛を、少の間借て見せましたし。氣轉はないか」と云ければ、士「お蔭にて我々も、ちよつと戴く爲なれば、隨分借て參らせん」と、庭の撒砂すな〳〵と歩み寄り、士「今遊ばせし物の音の、笛とやらん申て火吹竹の樣な物、我等がお主の姫君、終に見た事候はず。借て參れと申さるゝ、お心あれ」と有ければ、生「余り卑下成御口上、辭退申筈なれ共、御事を聞しるべ、吹けがして候」と、服紗に歌口淨めんとし給ふを、士「いや其儘が忝し」と追取て、足早に緣の上へ、くはら〳〵と一足飛に駈上り、士「サア借ました〳〵。お口のついた歌口の干ぬ先に姫君樣、それからは段々に、ちよつちよと甜つて廻しや」と、御唇に差付塗付、「又用無心も云爲、約束違へず早返さん」といへば、冷泉「いや〳〵今は返さぬ。姫君樣のお寢間へ都人のお忍びで、お手からお手へ請取渡し、それ迄は姫君樣大事の殿子の御笛、握つて〳〵握詰て御座んせ。それ女房達、お寢間取りや。火を灯しや」と打連て、皆々奥へぞ 三置 入給ふ。更け行鐘の初夜も過ぎ、夜露に濡て御曹司、「笛の返事は如何ぞ」と、褄戸の内に入給へば、十五夜見參らせ、「是和

すな〳〵―しなしな

御琴―御琴か

子樣、御笛を遲なはり、面目もなき事ながら、妾が姫君、御姿を垣間見の戀風が、ぞつとしてよりお枕上らず。あはれお寢間へお忍び有、お手枕の上にて、直に受取給ひなば、藥師勝りの若衆樣、さあお手引ん」と云ければ、牛「是は思ひも寄らぬ事、妹脊の道は未だ知らず。旅の空にてそれがまあ、さもしい事」とて逃給へば、十「是それを知らねばお侍のかなはぬ事。すは夜軍夜討と云時の、一番鑓の稽古に成、萬事のこなしは此十五夜に任させ給へ」と、押遣れば力なく、顫ひ〳〵牛若は、局々を打過て、淨瑠璃御前の閨の戸や、儿帳の影にぞ忍ばるゝ。十五夜呵き、「優しゐ聲にて何成とも、云かけ給へ」とほのめけば、牛「優しい聲とは笛の音か。母の形見の一管、戾してたべ」と仰ける。十「エエもどかしい、妾に任せて置給へ」と、若衆聲にて十五夜は、枕屏風をほと〳〵〳〵と、「數ならぬ、峯の松風琴の音に、通ひ迷へる笛竹の、一節の情をかけ給へ。吾妻の伽羅」とぞ申ける。お側に伏したる冷泉、「それ彼の樣か〳〵。少きしまして見さんせ」と申せば、姫君「如何成ともよい樣にしてたも」と、お聲も顫ひひつたりと、玉拔く汗もいとしらし。冷泉は姫君の聲を移して細々と、「誰そや誰そ、枕屏風に音するは聲がはりせぬ鶯の、塒に惑ひ給ふかや。餘所にも人の聞物を、歸らせ給へ」と有ければ、十

さもしい―あさましい
こなし―振取廻し
峯の松風―琴の音に峯の松風通ふちし云々の歌の句
一節―一夜にかくしまして―まどつかして

五夜「それ〳〵、お返事〳〵」と、いへ共若君身を縮め、「如何なる責に逢ふ事ぞ。戻して下され拜む〳〵」と計なり。「爰が大事のはづみぞ」と、又十五夜が聲細め、「つれなき事な宣ひそ。九重の塔が高しとて、鳶や烏が羽根打立て飛ぶ時は、九重の塔も下に見る。蒼海深しと申せ共、櫓櫂の立ぬ海もなし。山といふ山に霞のかゝらぬ山もなし、谷間といふ谷間に、ちり〳〵草の生ぬはなし。駒に踏れし道芝も、露に一夜の宿は貸す、風に揉るゝ笹竹も、小鳥に一夜の宿はかす、蘆の假寢の伽船も、比丘尼に一夜の宿はかす。今宵一夜は靡かせ給へ。情なの君や」と仰せける。姫君は急き給ひ、「最う能い加減仕損ふて給んな」と宣へ共、尭「いや〳〵戀はづみが大事ぞ」と、「雲に架橋霞に千鳥。木幡山にはあらね共、此方や口なし」とて音もせず。十五夜態とあらゝかに、「ム丶及ぬ戀との譬かや。とても焦れ死なんより、腹搔切て煩惱の犬となり、猫となつて寢所へ、ぐす〳〵と這入、爪を立てゝ何處も彼處も搔て〳〵搔たくり、ひり〳〵させて我思ひ、一度は晴し申さん」と、足拍子とん〳〵〳〵、とゝんとんと踏ければ、誠と思ひ姫君は、覺へず寢卷ほら〳〵と、駈出て直垂ノ御袂、控へらるゝも控ふるも、笑顔計の梅櫻、流し控への睨合、眞には中の思ひかや。斯て十五夜、冷泉は、「是では埒も曉近し。辛氣〳〵」

雲に架橋云々―架橋も雲にはかからず千鳥も霞迄は至らぬ
木幡山―山城の木幡山には梶の木敷多あれば口無しにかけて云へり
流し控云々―活花の用語をとる
曉―あかぬに掛く

常陸帶―占帶とて緣結にする源氏の君―光源氏にかく

と夕附の、「あれ鷄が鳴く鐘が鳴る。先出立が堅くろしい。烏帽子著たは繪にも有」と寄てかゝつて直垂や　常陸帶解く紐を解く。「淨瑠璃御前の瑠璃の肌。源氏の君の光り肌お肌比べ」と押遣れば、「いやじやゝ〳〵」と頭掉り、後は頷く花薄、亂れ伏猪の床の内、しつぽりひつたり、しつぽりひつたり、しんそこ〳〵、底の心ぞ解けける。

假初―刹にかく木になる―若熱とイむ体

第五

水淺黄淀の若孤假初の、こそ〳〵契ばつと成、母の長者に漏れ聞へ、女房遠を引連、寢屋の戸口に立覆ひ、「吉次殿、信高殿」と呼び給へば、内には十五夜、冷泉も木に成て、牛若君も、姫君も、二度の汗をぞ流さるゝ。吉次も夜明の目をする〳〵、亨何時にないけはしい聲、何事かは」と出ければ、長者色を變へ、「曲もない吉次殿、馴染共ない信高殿。同道なされた若衆が、姫が寢屋へ忍んで、ぬつくりやら、しやつきりやら。疑はしくは戸を明ふか。彼の淨瑠璃には心あての聟が有。大事の娘に大疵付て、何んで癒るぞなをるぞ、分別なされ吉次殿」と、疊たゝいてねだらるゝ。亨「御尤〳〵。若み人の同道は、斯樣の事に草臥れる。如何樣共詫言申さんが、して心懸の聟御とは、誰人にてばし

いき〳〵なされた—今迄元氣上かりし

院宣の綱頂戴云云—義經に院宣も受けられうし鈴木にも對面せられよと也

候ぞ」と言ヲヽ誰あらふ、源氏左馬頭義朝の八男牛若御曹司よ」吉次悔として。「ヤ牛若を戀聟とは平家の聞へ、長者のお爲も能らぬ事」と、いはせも果ず、長「是曲もないとは其處を申さん計ぞや。彼の若君こそ御曹司にて渡らせ給へ。疾に知らせ給ふとて、妾が外へ漏すべきか。近比聞へぬ御心。去ながら此お恨みも嬉しゐ餘り、矢剣の長者が分として、源氏の大將を聟に取ると申事、二世や三世の冥加ならず。是も冷泉十五夜が中立とや。出來した〳〵。此處へ出よ」と呼給へば、蘇生りたる心地にて、二人はおづ〳〵畏り、「斯樣に御機嫌直らんとは存ぜず、只今の恐ろしさ、姫君樣も我々も、心は消へ入如くにて、いき〳〵なされた牛若樣も、ぐんにやりとならんした」と、溜息つくこそ道理なれ。吉次嬉しく、「扨牛若君とは誰が知らせ申せし。但し長者の御推量か」と有ければ、「知らせ人是に候」とする〳〵と立出、「我等は鈴木の三郎、龜井の六郎と申兄弟の熊野武者、平家追討の院宣のお使に參つたり。又武藏坊辨慶、御厩の喜三太は北國路を御先へ、秀平館にて待奉らんとて罷立、御母常盤御前は、都を忍びて中仙道を御下りと承る。又清盛入道は、火の病と申難病に冒され、今を限りの有樣。彼是源家利運の御吉相はや〳〵御披露賴み申」と述ければ、吉次大きに悅びの、足も手も地に付ず「先院宣御

頂戴。鈴木殿兄弟御目見へ。それ〳〵女房達、是へお出と申て給べ。其儘寢卷召ながら、帶なされいでも大事なし。引摺起して下され」と、そどろに悅び勇みける。長者余りの嬉しさや、「目出度やな〳〵。迎の事に御座敷をも改め、御將束にて御頂戴。幸我等が西の對に、色紙の間と申て藤原の定家朝臣、十六才の時、七首の名歌の心を繪にいろ取筆に染め、妾がつまに下されしを、一間にしつらひ置侍ふ。此座敷にて院宣の御拜見方々の御目見へ、淨瑠璃と若君の御祝言のお盃、目出度い事の有條を、揃て祝ひ申べし。さあ此方へ」と有ければ、亨扨こそ我名も吉次なり。牛若君の牛起に、淨瑠璃玻璃は寶の玉、福女房の御祝言」末繁昌の初なる御壽の最中に、藤原の秀平が三男、泉の三郎忠平、御迎の爲として三千餘騎を相具して、ざんざめかいて伺公する。君御對面ましまして、御悅喜甚淺からず。鈴木は「是より暇給はるべし」と、熊野山若一王子に奉納の御願狀。文筆は達したり、即座に書て差上、高らかにこそ遊ばしけれ。「抑〳〵當社は是三熊野の、九十九所の王子〳〵、若一王子とたゝせ給ふ。事も愚や、御本地は久成正覺の如來、大悲千躰の菩薩なり。かるがゆへに、下化衆生の願ひを充てんが其爲に、光を高天原にやはらげ、跡を三熊野の靈地に顯はし、御惠み降雨の國土を潤す如くなり。

うし起—丑起、前途を祝ふ意

ざんざめかす—陽氣に騷ぐ

若一王子—熊野權現の末社

久成正覺云々—阿彌陀如來と觀音勢至菩薩

下化衆生—下界に下りて衆生を濟度する

うてな—臺、血統にいふ
桃園—皇族

爰に苟くも清和のうてなを出、桃園の御葉末、源の牛若丸、獻上祈文の意趣は、平氏追討の一望なり。時今平家四海を呑むの勢ひあつて、上をおかし奉り、民を惱し痛しむ、且は國の怨敵、又は某父祖の敵。彼といゝ是といひ、神力を得奉らずんば、いかで彼を亡ぼさどらん。仰願くば、感應誤る事なからしむべし。願成就有においては、御本社、拜殿、末社〳〵九十九所、殘らず造營し奉らんに、或は金銀瑠璃を以て甍を磨き、珊瑚、琥珀、硨磲、瑪瑙を敷て、平地の光燭々と、水晶の色の中よりは、金の光を出し、互ひに光耀し、神領、社領、御供領、一万町を寄せ奉り、百饌百味の神供を捧げ、八人の乙女、十人の神樂男、朝の御神樂、夕の祝詞、禮幣奉幣退轉なく、神慮をすゞしめ奉らん。逆從を一戰に攻靡け、天下太平の功を得せしめ給へ。夜の守り日の守りと守護せしめ給へ。治承三年八月吉日、源の牛若敬て申」と、讀上給ふぞ有難き。それより直に奥州門出のお盃、淨瑠璃御前お迎の約束のお盃、譽れは雲井の盃や、三々九郎判官と、御果報、御威勢、御手柄、夜にます日にます年に倍々汁月、實千秋の秋つ國、源氏の御代の繁昌の、淨瑠璃こそは目出たけれ。

乙女—巫女
神樂男—神樂雛す男
退轉なく—永久に止めず
すゞしめ—すゞやかに和げる

近松淨瑠璃集中卷終